
紫陽花の首飾り

マイペンライエリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫陽花の首飾り

【Nコード】

N0085M

【作者名】

マイペンライエリー

【あらすじ】

私はシングルマザーの36歳。

生活の為に男を探していた私は、出会い系サイトで賢治と出会ってから人生が激変した。

母性を失い男に溺れる私はついに？？？

他サイトと重複掲載を行なっています。

台所でぐったりした息子を慌てて揺り動かす。

高い所からまるで人ごとの様に見ているもうひとりの私がいた。

隣の部屋で寝転んで野球の中継をめいっぱいのボリウムで観ている賢治。周りにビールの空き缶が何本も転がっている。

かなり泥酔している。この男には悪魔が宿ってるんだ。

賢治と知り合ったのは携帯の出会い系サイト。

駅のオブジェの前で待ち合わせた私と賢治は会ってすぐ意気投合した。

8歳年下の28歳。左官工だった。

少し甘いマスクとは逆にぶっきらぼうな話し方をするのが私は好きだった。

私は36歳。バツイチで1人の子持ち。6歳の息子があつた。

3年前 サラ金で借金が膨れ上がった夫と離婚。
今はスーパーで働いている。

生活に余裕などないけれど父が残してくれた家に住んでいるので何とか生計を立てて暮らしている。

賢治と知り合つてすぐ彼は家に住み着き、もうすぐ1年になる。

仕事はお天気次第の賢治は 雨が降ると家で一日中テレビの前でごろごろしていた。

それでも仕事がある時はかなりの高収入で私たち家族はそのお金で助けられていた。

私が勤務に行つてる間 息子の大は保育園に預けている。

大は言葉が遅く なかなか自分の意思が伝わらないと大声を出して泣いた。

最初賢治がうちに来た時は 押し入れに入つて出て来なかった。

賢治は初めのうちはおもちゃ等で気を引こうとしていたが 大がなかなか心を開かないので諦め 無関心になった。

大が泣くと必ず賢治は私に何とかしろと怒鳴る。
子どもの鳴き声が嫌で堪らないんだと不機嫌になった。

賢治の怒鳴り声を聞いてなおさら大は大きな声で泣きわめく。

そんな時は大を外に連れ出して　うちから１０分位離れた公園で遊ばせる。

ブランコや滑り台に乗ってるうちに大の機嫌が良くなるのを見計らって　大をそのまま公園に置いて　私はそつとうちに帰った。

賢治の機嫌を取る為　甘い声で抱きつきそのまま私と賢治は快樂に耽った。

２時間くらいたってから急いで公園に行くと　大はしょぼんと砂場に座っているのが見える。

時には雨に打たれてずぶ濡れで滑り台の下に佇んでいる時もあった。

私は大を抱きしめ「ごめんね、ごめんね。」と繰り返すのだった。

大は一人ではまだ家へ帰れない、いや帰りたくないのかも知れない。

それから近くのコンビニでお菓子を買って大に与え　手を引いて家に帰った。

私は賢治から離れられない。経済的にもそして体も。

賢治のあの若いエネルギーがわたしを全ての事から解放してくれる、
一種の麻薬みたいに。

だから捨てられない様 私は賢治のご機嫌を取る。時には大を犠牲
にしても。

一度妊娠したが これ以上子どもの声は聞きたくないと言う賢治の
言葉に墮胎した。

私は何て罪深い女だろう。

2人きりの時の賢治は 時には激しく時には母親に甘える様に私を
求めた。

私も賢治の求めに応じて喜んで受け入れた。まるで発情したメスミ
たいに。

2人の生活はうまくいった。最初のうちは。

そこに大が入ると悲惨なことになるのだ。

大は私を賢治に奪われたと思っていたのだろう。賢治に対して反抗心も出て来た。

呼ばれても振り向きもせず賢治の事を無視しだした。それが賢治は面白くなかった。

賢治は酔うとしつこくなって大に絡んだ。ご飯の食べ方が悪いと言つては頬を殴った。ドアが開けっ放しになると言つて大を蹴った。

大はこの頃泣きもせず 上目遣いに賢治を睨むようになった。賢治はその目つきが気に入らないとさらに蹴った。

暴行は賢治の気の済む迄、または賢治が怪我をするまで行われた。

私には大を庇う事は許されなかった。そうしたら賢治は私を捨てるだろう。。。捨てられたら私は生きて行けない。。。。

私はそんな時 トイレに籠って耳を塞いで泣くしかなかった。

暴行が終わり 大の怪我に薬を付けてやる間中 私は大の目を見る事が出来なかった。

賢治は暴行が終わると大のしつけの為と自分を正当化するようなくだらない言い訳を言い、外に飲みに出て行った。

保育園で顔の痣について質問されたが、私は転んでぶつけたからと嘘をついた。

大は保育園では一言もしゃべらずにいたらしい。私を庇っていたのだろう。

何の為に庇うのか、こんなろくでもない母でも責任を追求されたら可哀想と思ってしゃべらずにいたのかと思うと自分に情けなくて涙がこぼれた。

私は海沿いの街で普通のサラリーマンの家庭に生まれた。

父は外ではとても愛想が良かったが家ではひどく黙り込んで機嫌が悪かった。

母と仲が悪い訳ではない。気分屋だったのだ。

仕事で面白くない事があると不機嫌な顔をして帰って来る。

そして家族の何かが気に入らないと怒鳴り散らすのだ。

例えば箸の使い方とか、口の利き方が悪いとかそんな些細な事でもひどい剣幕で突然怒り出す。

おかずが少ないと言っては料理を全部テーブルからたたき落とす。

だから機嫌の悪い顔をして帰って来た時は母と私は腫れ物に触る様に父に接した。

その剣幕は妻である母ばかりか子どもにまで及んで来る。

母は隣の部屋まで飛ばされるくらい殴られていた。

私も嘘をついたといつては殴られ 冬の夜に裸足で外に放り出された事もあった。

私が父に怒られている間 母は涙ながらに身を以て私を庇ってくれていた。母がいたから今の私の命があるのかも知れない。

大きくなってからも 私は男が大きな声を出したり 大きな音を出して物に当たる場面に出会つと震えて立ちすくんでしまうのだった。

高校の時私の隣の席の男の子が 授業中隠し持って来た本を読んでたのが見つかり 先生はいきなりその子の頬を殴った。

私は隣で授業が終了する迄小刻みに震えていた。

暴力行為はわたしのトラウマとなっていた。

そんな暴力的な父とそれに耐え忍んでいる可哀想な母の姿を見るのが嫌で 私は高校卒業と同時に東京の大学に進学した。早くあんな家から出たかった。

両親は私が出た事に反対したが 私の決心が堅いのを知ると諦め、学費だけは出してくれた。

東京では寮に入り 学生生活を楽しく過ごした。

幸いにも私の周りには暴力的な男はいなかった。

早く実家に帰る様に催促されていたが、一度も故郷に帰る事無く私は東京で就職した。小さな貿易会社だったが従業員みな仲良く働きやすかった。

その取引先の営業マンと私は結婚したのだった。

彼は穏やかな人だったが気が小さな所があつて 取引が上手くない日には泥酔するまで酔つて警察から電話の呼び出しが来る事も度々あった。

そのうち取引先から預かりのお金を競輪で大損して 穴埋めの為に会社のお金を使い込みまたその穴埋めにサラ金から借金するという負の繰り返しでどうにもならなくなったのだ。

大が生まれた時は喜んで 子どもをかわいがっている父親だったのに、賭け事だけはやめられなくなりそのうち家庭も顧みない男になつてしまつた。

大が懐いてたのに離婚するのは可哀想だったが 借金の取り立てが私の所迄来る様になり、離婚したのだった。

私が結婚して間もなく 実家の母は病気で亡くなり、後を追う様に父も脳梗塞で病院で亡くなつていた。

財産は殆ど残つてなかったが 家だけは一人娘の私が相続した。私の稼ぎだけでは生活がぎりぎりです 生活保護も考えたが持ち家があると支給してくれない。

母子二人、住む所も無くなつてしまふのは忍びなくて 生活の為に

男に頼ってしまった。

けれどそのうちお金だけじゃなく 悲しいことに体も男に依存する様になった。

いっぱい情報を収集する時期に次々知らない男が家に入って来て母親と男の醜い営みを見て育った大は言葉を発しなくなった。

アノ事が子どもの正常な成長の妨げになるなんて思いも寄らなかった。

私は快樂とお金の為に子どもを見捨てている事に気付いてなかった。男がいない時には大を目一杯可愛がっていたつもりだった。

男たちは必ず私の元から去って行った。結婚しようと言ってくれる男はいなかった。

その誰もが気の弱い男ばかりだった。

子どもがいるからだ。子どもが邪魔なんだ。
だんだん大が靴に着いたガムの様に うっとおしく邪魔になっていく自分に気付き始めた。

早く男を探さなくては。。。今度は弱い男じゃなくより意思の強い男を求めて私はまた携帯のボタンに指を置く。

それが取り返しのつかない事になるなんて考えもしなかった。

最初賢治は出会い系サイトで知り合った女が 自分より年上だったことに苛ついていた。

本当は自分よりも若い子と知り合う事を望んでいた。思い通りにする為に。

しかし思ったよりも女が親切で若く見えた事に妥協して付き合い始めたのだった。

賢治の両親は早くに離婚して父親に育てられた。

育てられたといっても殆ど酒ばかり飲んで暴れている父親の尻拭いをさせられていたのだったが。

父親は屋台で焼き鳥を売って生計を立てていた。

僅かばかりの売上金も 手に入ると全部飲んでしまい賢治は中学の

給食費も払えない事が多かった。

貧困さゆえに服装も清潔にはほど遠く 学校ではみんなから遠巻きにされ話しかけても貰えなかった。

路上に酔いつぶれている父親を背負って家に連れ帰るのは毎度の事だった。

賢治は幸せそうな家族連れを呪いながら よろける様に家に連れ帰った。

中学を卒業してすぐ左官工の見習いに住み込みで入り、技術を習得した。

しばらくして町の少し大きな工務店に移ってからは真面目に働く寡黙な男と言う事で仕事を任されていた。

だが賢治は常に苛々していた。

自分の生まれた環境に苛つき、自分の度量の限界にも苛ついていた。働いても働いても生活の向上は見られず、常に社会に対して不満を持っていた。

そんな賢治だから他の人とのコミュニケーションを上手く取る事は出来なかった。

仕事は無難にこなしていたが仲間とは一線を画して殻に閉じこもっていた。

時々苛ついては路地裏の野良犬を蹴ったり 浮浪者を殴っては鬱憤を晴らしていた。

初めて女を抱いたのは安居酒屋で隣り合った中年の太った女だった。

女から誘われて安ホテルで一晩過ごした。賢治は感動していた。

自分を受け入れてくれるものの暖かさと柔らかさに。

恨みも鬱憤も忘れて一瞬の快楽に融けていった。

それから賢治は女といるときだけは自分の存在が証明されるような気がして 常に女を探していた。

だが なかなか女は自分の思い通りにならないものだと言う事も学んでいた。

そんな時 大の母親に出会った。

女がかなり歳上だと言う事を負い目に思っている事と自分の稼ぎを

あてにしている事を逆手に取って 賢治は女を思い通りにしようとした。

関係が深まるうちに女の家が案外居心地よく かなりのわがまを聞いてくれる優越感に賢治は我が物顔で家の中に居座る様になった。

ただひとつ、大を除いて。

大は自分を毛嫌いしている。

相手が小さくても 自分を嫌っているという刺さる様な感情は賢治の気持ちを逆なでした。

最初はしつけをするという名目で女に遠慮しながら怒鳴っていたが 賢治の苛々の矛先は完全に弱くて小さい大に向けられやがてそれは体罰へと代わった。

大の反抗的な目は怒りの感情を暴発させるきっかけになるには充分なものだった。

「こいつは俺の弱さを知っている。」と賢治は思った。

いつからだろう 道ばたの草や木を見なくなったのは。

子どもの頃はしゃがみ込んで葉脈の美しさや どんどこからでも生えて来る雑草の生命力に感動してたのに。。。

生活に追いかけて気持ちの余裕がなくなっていたからなのか
それとも心が汚れたのを植物に見透かされるのが恥ずかしくてなのか、自分でも解らないけど。

保育園の帰り道 大が道ばたにしゃがみ込んでも 私は一緒にその植物を見なかった。そんなこと面倒くさく意味のない事に思った。立ったままイライラしながら見下ろしていた。
大の髪の毛がさらさらして金の輪が光って見えるのにも 私は気が付いていない。

そればかりか大の手をぐいっと引いて 早く帰ろうと促していた。

家で賢治が機嫌悪く 夕ご飯を待っていると思ったら居ても立ってもいられなかったのだった。

こんなところでぐずぐずしてはいられない。。。

最近私は賢治の暴力に縛られていた。小さい頃のトラウマが甦って私をまた恐怖に陥れていた。

賢治は思う様にならないと 私にも暴力をふるう様になっていた。大をしつけないと言って立ち上がれなくなる程殴られ蹴られるのだ。私は恐怖で賢治の言いなりだった。

しかし暴力を振るわれた夜、賢治はとても優しくなり私に泣きながら謝る。

私は泣いている賢治をすでに許していた。優しくされる事に安らぎ、弱い一面を見せる賢治を支えるのはこの私しかないと思い込んでいた。

こうして私たちは暴力とSEXで離れられなくなっていくた。

そんなある日 保育園の帰り道で 大は公園のトイレの裏にあった紫陽花の花を見て駆け寄り、花を一房手折ると私の元へ戻りせいいっぱいの笑顔で私に差し出した。

「があちゃんに。。。」

雨の雫がいつぱいついた紫陽花をぐいぐい私の胸元に押し付けた。

「ぐびがざり。。」

私のTシャツはみるみるうちに雨のシミが出来た。それはわたしの心のシミとなって重く冷たくしみ込んでいった。

この頃母親らしい事をしていない自分が非難されてるような気がし

て、うつとおしかった。

私は邪険に言った。「押し付けないでよ！ほら、こんなに濡れちゃったでしょ！」

喜んでもらえると思ってた大はびっくりして立ち尽くしている。

「それに、これは大きすぎるの！首飾りには出来ないの！」

私は大から濡れた紫陽花を受け取ると、ポンと公園の水飲み場の上に置いて大の手を引っ張って家に帰った。

大が何度も紫陽花を振り返っているのも気付かずに。。。

今日は賢治が休みだから早く帰らなきゃ。。。。私はそれしか考えてなかった。。。

薄紫とつゆくさ色の混じった紫陽花は雨の雫が涙になって　コンクリートの水飲み場にぽつねんと横たわっていた。

家に帰ると雨で仕事のなかった賢治は機嫌悪くテレビを観ていた。
お酒も飲んでいる様だ。

家の中は気持ちが悪いくらいの湿気の中 煙草の煙が充満していた。

帰るのが遅いといきなり怒鳴り灰皿を投げつけられた。

アルミの灰皿は私の頬をかすめ台所の食器棚のドアに当たり床に落ち クアंकクアंकアンと回りながら大きな音を立てた。

大は 私の頬から血が出るのを見て怯え泣き出した。

「うるせえ！なんとかしろ！」

賢治は私を睨みつけ今にも私に飛びかかるように体を動かした。

私は何としても大を黙らせなくてはならないと思った。そうしなければ私は大変な目にあってしまう。私は恐怖で一杯になっていた。

私は震えながら 泣きわめいている大の口に手を当てた。「シーツ！泣かないで。」

大は嫌がって体をよじって大声を出した。

手足をバタバタして必死に嫌がった。小さいのにそのエネルギーは私を撥ね除けてまだ有り余るくらい力だった。

見開かれた大の瞳には醜い私が映っていた筈だった。

私は必死になって大の体の上に馬乗りになって口を塞いだ。

賢治は怒鳴りながら私を威嚇している。

「泣かないで！　泣かないで！　泣かないで！」

私は泣きながら叫んでいた。

どのくらいの時間がたったのだろう。
はっと気がつく和大はぐったりしていた。

私は慌てて大を抱き起こした。

「大！　大！　大！」　揺り動かしても　大は動かなかった。

大の両目からは涙がひとすじ流れていた。
口を小さく開けて 何かを言いたそうにしていた。

今 私は何をしたのだろう。

頭の中の私が 「人殺し！」と繰り返している。

振り返ると賢治は眠っているのか酔い潰れているのか寝転がって後ろを向いている。

テレビの音だけが部屋中に響いていた。

私は大を抱えると転げる様に外に飛び出した。そして表通りを歩い

ている人に助けを求めた。

その人は私の形相に驚きながらも　ぐったりした大を見るとすぐに携帯電話で救急車を呼んでくれた。

蘇生処置を施されている大を見ながら　救急車の中で私は必死に神様をお願いしていた。

大を助けて下さい、大を助けて下さい、大を助けて。。。。

喉の奥から熱い塊が込み上げて来る。

頭の中が真っ赤に熱した鉄で突き抜かれた様に膨れ上がっている。

耳の中で心臓を打つ音が銅鑼の様に鳴り響いている。

病院に到着すると警察が待っていた。

ストレッチャーで運ばれる大を追いかけようとして私は警察に肩を掴まれた。

「奥さんちょっと状況確認させて下さい。」。。。

私は今 服役している。

刑が満了してもこの十字架が下ろされる事はないだろう。

私は一生この罪を背負っていくのだ。

これから先私が死ぬ迄 さらに死んだ後もずっと。。。

大は 奇跡的に命を取り留めた。

今は児童養護施設で元気に暮らしていると聞いた。

私に逢いたがっていると聞いて 私は身をよじり声を出して泣いた。

今日もまた雨が降っている。

窓の外には紫陽花が咲いている。

私は まるで大の涙の様に美しく光ってこぼれ落ちてゆく雨の雫を眺めている。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0085m/>

紫陽花の首飾り

2011年10月7日10時43分発行